

知花 愛実（司会、神奈川大学アジア研究センター所員）：皆さんこんにちは。今日は、神奈川大学アジア研究センターシンポジウムにお越しくださりましてありがとうございます。本日の司会進行を務めさせていただきます知花と申します。よろしく申し上げます。それではシンポジウム開催にあたり、主催者、アジア研究センターを代表しまして、山家所長よりごあいさつ申し上げます。よろしくお願いいたします。



ごあいさつ

山家 京子（神奈川大学アジア研究センター所長）：

皆さんこんにちは。さて、アジア研究センターについてまず簡単にご紹介したいと思います。アジア研究センターは、本学の学部・研究科の横断的な研究組織として2013年4月に開設されました。アジアおよびアジアの諸地域を対象に、政治、経済、社会、文化、科学技術など、個別学分野の枠を越えた総合的かつ学際的な研究に取り組み、調査研究と学術交流を通し、アジアの平和と発展に寄与することを目的としています。



自分の話で恐縮ですが、私は都市計画、まちづくりを専門としています。都市の歴史を俯瞰（ふかん）する時、歴史が分断される理由は2つあります。すなわち災害と戦争です。都市そして建築は人々の記憶の器であると言われるのですが、この2つによって記憶の器である建築・都市は壊れてしまいます。

2019年末から始まっていまだ終息の気配がないコロナパンデミック、そしてロシアによるウクライナ侵攻。コロナパンデミックは疫病という災害です。地震のように直ちに都市が壊れるということはないのですが、何かしら建築・都市の在り方を変えていくだろうと言われていています。ウクライナでは今も歴史をつないできた建築物が破壊されています。そしてアジアを語る時に、占領・統治は避けて通ることのできない重要なテーマです。

私はまちづくりに関わる時に、住民という抽象的な言葉ではなくて、Aさん、Bさんという呼称、そして個人が集まった集団を意識するようにしています。コロナによる死者が何人、あるいはウクライナ侵攻による死者が何人というような報道がありますけれども、それはただの数字ではありません。それぞれに家族があり生活があります。人々の物語に着目した本日のテーマは、本質的かつ刺激的なものだと感じており、私自身とても楽しみにしています。

終わりになりますが、今回のシンポジウム開催にあたりまして、実に多くの皆さまにお世話になりましたことを改めて厚く御礼申し上げます。私のあいさつと代えさせていただきます。

知花：山家先生、ありがとうございました。それではこれより講演者の発表に移りたいと思います。本日御1人目の講師、琉球大学国際地域創造学部准教授・山里絹子先生はハワイ大学マノア校大学院社会学部の博士課程を修了され、現在は琉球大学国際地域創造学部でご活躍中でございます。山里先生は、アメリカ研究、社会学、移民・ディアスポラ、戦後沖縄文化史、ライフストーリーなどを専門分野としており、昨年4月に集英社から御著書『「米留組」と沖縄—米軍統治下のアメリカ留学—』を出版されました。それでは山里先生、よろしくお願いいたします。